

# 読書習慣の育成～子どもたちが喜び自ら訪れる図書室を目指して～

千塚小学校 学校図書館事務員 石川 聖也

## 1 はじめに

今、学生の「不読率」が問題となっています。

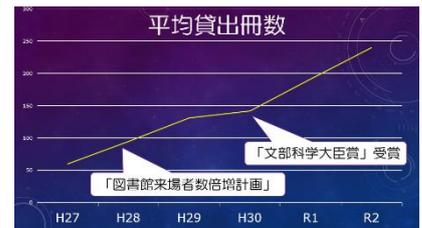
不読率とは「1か月に1冊も趣味で本を読まない人の割合」のことで、令和2年度の栃木県の不読率は右図のとおりとなっており、特に高校生の読書離れが目立ちます。50%を超えるのはOECD加盟国の中でもまれで、世界的に見ても非常に高い数値です。



今後スマートフォンの普及が進み、不読率がさらに悪化していくことが懸念されていますが、小学生・中学生のうちから読書習慣の育成をしっかりとしていくことで、高校生以上の不読率の改善が期待できます。

## 2 千塚小学校の読書量

子どもの読書離れが進む現代ですが、本校では平成28年度に「図書館来場者数倍増計画」を打ち立ててから、全校で本を借りる習慣が定着し、貸出冊数が年々伸び続けています。



また、月に10冊以上本を読む児童の割合は栃木県の平均が21.8%<sup>1</sup>であるのに対し、本校は72.1%となっており、読書量がとても多い学校であることが分かります。



## 3 実践内容と効果の根拠

では、どのようにして児童の動機付けをして、意欲的に読書活動に取り組ませているのか。本校の取組を以下に紹介し、それぞれ効果の根拠も述べていきます。

### (1) ポイントカード

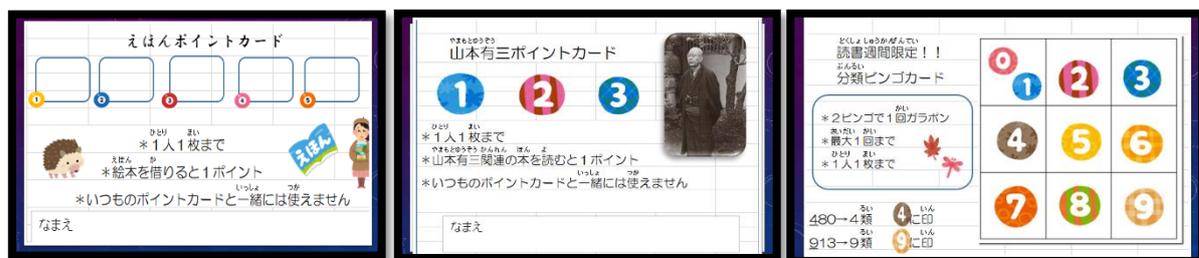
本校では図書を借りると必ずポイントカードにポイントをもたらえるシステムになっています。右図が普段使っているポイントカードで、10ポイントたまると後述するガラポン抽



<sup>1</sup> 「令和2年度 子どもの読書活動に関する実態調査結果」栃木県教育委員会

選会でガラポンを1回ひけるというシステムになっており、本を借りる動機付けになっています。

また、「絵本ポイントカード」や「山本有三ポイントカード」、「分類ビンゴカード」など、特定の本を借りることでポイントがたまるカードを配付することで、借りる本の幅を広げる効果もあります。



## (2) ガラポン抽選会

前述したポイントカードを使用することでガラポン抽選会に参加し、景品をもらうことができます。各学期末と読書週間時に実施していますが、この日をとても心待ちにしている児童が多く見られます。

出た玉の色によってもらえる景品の種類が異なり、1週間ずっと本を2冊借りられるようになる「1週間2冊券」や、読みたい本を取り置きできる「予約カード」、鉛筆、しおりなどを準備しています。1番当たりの金賞が出た場合には児童からイラストのリクエストを受け付け、「オリジナルビッグしおり」と銘打って後日プレゼントしています。



### 【部分強化】

ガラポン抽選会が楽しい理由には「部分強化」という効果が関係しています。部分強化とは「条件付けに際して必ずしも反応ごとに強化を与えない手法」と定義され、報酬にランダム性をもたせることで効果が発揮されます。右図のとおり、報酬にランダム性をもたせることで、子どもたちはワクワクし、「再挑戦したい」という気持ちが芽生え、図書を借りる動機付けにつながってきます。

一方で、毎回報酬が同じ「連続強化」になってしまうと、子どもたちは報酬に慣れてしまい、意欲付けにつながりづらくなってしまいます。



## 【エンハンスング効果】

「外発的動機付けによって内発的動機付けが高まり、モチベーションが上がる効果」のことを「エンハンスング効果」と言います。もともとはポイントや景品などの報酬狙いで本を借りていた児童が、いつの間にか読書が大好きになっている様子が本校ではとても多く見受けられます。



### (3) 読み聞かせについて

本校では、給食の時間に教職員がローテーションを組んで放送で朗読をおこなう「聞く読書」や、図書委員やボランティア団体「くすくすの会」の方々による読み聞かせ、縦割り班の高学年児童が下学年児童に読み聞かせをする「ペア読書」など、さまざまな種類の読み聞かせを行っています。



とても集中して、楽しみながら読み聞かせを聞く児童の様子が多くうかがえます。

## 【なぜ読み聞かせが大切なのか】

読み聞かせをされている時の子どもの脳の活動を、MRI を用いて研究した実験があります<sup>2</sup>。その実験で、母親による読み聞かせのビデオを見せたところ、コミュニケーションの中でも特に聞く力に関わる「側頭葉」と、感情反応や記憶に関わる「大脳辺縁系」に大きな活動がみられました。一方で、母親のビデオを逆再生して見せたところ、これらの活動は見られませんでした。また、母親以外の人による読み聞かせを見せたところ、「大脳辺縁系」の活動は見られませんでした。このことから、CD やアプリではなく、「身近な人による読み聞かせ」を積極的におこなった方がよいことがわかります。

具体的な読み聞かせの効果としては、語彙力の向上や聞く力の向上、コミュニケーション能力の向上、問題行動の減少などが報告されています。

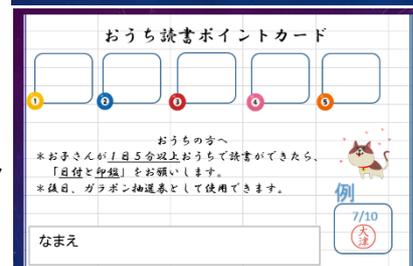
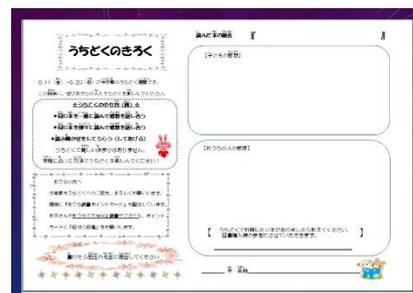


<sup>2</sup> 『「本の読み方」で学力はきまる』川島隆太、青春出版社、2018年

#### (4) 「うちどく」について

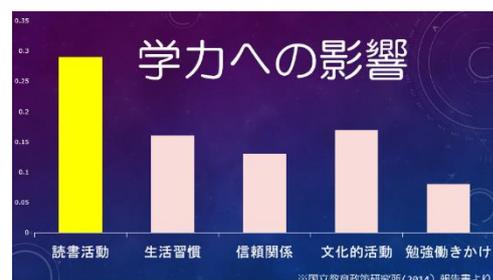
「うちどく」とは、「家族や身近な人と本を読んで感想を話し合ったり、好きな本をすすめてあったり、読書習慣を共有することでコミュニケーションを図り、家族の絆を強める取組」と定義されており、栃木県でも推進されています。本校ではもう少し広い意味で、「家でも本を読めるようになりましょう」と呼びかけています。

具体的な取組としては、学期に1回「うちどく週間」を設け、その際に「うちどくのきろく」に子どもとお家の人の感想を書いて提出します。また、感想をいくつかピックアップしてまとめた「うちどくだより」や、家で5分以上本が読めたらお家の人にポイントをもらう「おうち読書ポイントカード」、読んだ本の記録をつけられる「読書カレンダー」、「うちどく」の大切さや習慣化のコツを記載した「図書だより特別号」などの配付も行い、「うちどく」に力を入れています。



#### 【なぜ「うちどく」が大切なのか】

家庭での養育者の働きかけが学力に及ぼす影響の程度を調べた研究があります<sup>3</sup>。その結果、生活習慣や信頼関係・コミュニケーション、文化的活動、勉強に対する働きかけなどよりも、読書活動が学力により影響を与えていることが判りました。「小さい頃に読み聞かせをした」や、「子どもと一緒に図書館に行く」などの本を読むことに関する保護者の態度・行動を総合して読書活動ととらえています。



また、OECDの報告書では、親子での読書量が多いほど15歳時点での学力が高いことが報告されています。

さらに、本校でも独自のアンケートを実施し、「家での感想交流頻度」と、「児童の家での読書量」・「読書好きな児童の割合」の相関関係を調べました。右図のとおり、家での感想交流頻度が多い家庭の児童の方が家での読書量が増え、読書好きな児童の割合が多いことが判りました。

以上の結果から、「うちどく」が子どもたちにとって非常に重要な活動であることが言えるでしょう。



<sup>3</sup> 「平成25年度 全国学力・学習状況調査」国立教育政策研究所